

## 「樹氷復活県民会議」設立趣意書

蔵王連峰の1,300mから1,700mの亜高山帯には、オオシラビソ（別名：アオモリトドマツ。以下「オオシラビソ」という。）を主体とした森林が広がっています。日本特産種であるオオシラビソは、日本の針葉樹の中では最も多雪環境に適したものの一つとされており、県内では蔵王連峰のほか吾妻連峰にしかまとまった森林を見ることはできず、この地の特徴的な植生であるということが言えます。また、このオオシラビソを主体とした森林（以下「オオシラビソ林」という。）に、季節風の影響で着氷と雪片の付着が繰り返されることで形成される樹氷（アイスモンスター）は、非常に特異な自然現象であり、世界的にも希少で貴重な自然景観であるとともに、本県の冬のシンボルとして、海外でも広く知られる重要な観光資源となっています。

ところが、山頂付近のオオシラビソ林については、平成25年のトウヒツヅリヒメハマキの幼虫による大規模な食害の後、トドマツノキクイムシによる穿入等を受け、広範囲にわたり枯損しており、今後枯損による倒木が進めば、森林生態系や樹氷の形成への影響が懸念される状況となっています。

また、山頂付近では自生する稚樹がほとんど確認できないことから、今後自然の力のみによる再生は期待できず、その再生には植栽等を行う以外に方法はありません。しかしながら、オオシラビソ林を再生させた事例は全国的にも例はなく、再生に係る知見の蓄積が必要となるうえ、再生するまでには概ね70年以上もの長い時間を要すると考えられています。さらに今後気候の温暖化が進んだ場合は、オオシラビソ林が再生されても、樹氷が形成される環境ではなくなってしまうことも懸念されています。

このような状況の中、令和3年5月、林野庁東北森林管理局（以下「東北森林管理局」という。）が行うオオシラビソ林再生に向けた様々な実証実験に協力・参加する官民一体の組織として「アオモリトドマツ再生会議（仮称）」（以下「再生会議」という。）が設立されました。また、オオシラビソ林再生・樹氷復活に取り組む企業・団体も現れてきております。

蔵王の樹氷は山形県の冬を代表する景観であり、私たち県民は、森林・観光資源としてのみならず、商工業など様々な分野にわたってその恵みを享受してきました。

その景観を将来世代に手渡し、その恵みを脈々と守り続けることができるよう、前述した再生会議や企業等における取組みを受け、オオシラビソ林再生・樹氷復活の取組みを全県的な活動として推し進めるため、令和4年8月に開催された「第6回『山の日』全国大会やまがた2022」において、再生会議を発展する形で、樹氷復活に向けた県民会議を設立することを宣言いたしました。

本県民会議は、東北森林管理局が行うオオシラビソ林再生に向けた取組みへの支援に加え、県民が自然環境の大切さを考え、自らその保全に貢献するとともに、行政機関・企業・団体の協力を促し、持続可能な社会の実現に向けた機運の醸成を図ることで、蔵王連峰の特徴的な植生であるオオシラビソ林を再生し、ひいては県民の宝である樹氷の景観を復活させることを目的に設立いたします。

令和5年3月13日

樹氷復活県民会議

設立代表者

山形県知事 吉村 美栄子